

3 花 き

項 目	作 業 内 容
(1) デルフィニウムの栽培管理	(今月の作業のポイント) ○デルフィニウムの栽培管理 ○ばらの栽培管理 ○9月咲ききくの挿し芽と定植 ○シクラメンの育苗管理 ア 温度管理 ‘さくらひめ’の5月の生育ステージは、9月定植では3番花の伸長期、11月定植では2番花の開花時期である。エラータム系デルフィニウムでは、5月は3番花が開花している。5月の急激な温度変化や高温が、花穂の徒長や曲がり、採花後の花散り等、切り花品質に影響を及ぼすため、温度管理に気を配る。ハウス内の最高温度は25℃を超えないように、換気扇や循環扇を活用して換気を徹底する。 イ かん水・施肥管理等 かん水と施肥は、採花を8割程度終えた頃に行う。作業の遅れやかん水量不足は生育不良となるため、適期に実施する。抽台～伸長期は、気温上昇に伴い植物の水分吸収量・蒸散量が多くなるため、土壌を乾かさないように定期的にかん水する。出蕾後は茎を硬くするため、少量かん水とする。土壌表面を乾燥気味にするが、温度や日射量によりかん水回数を加減し、土壌水分を一定に保つようにする。 施肥管理は、有機配合肥料を‘さくらひめ’では3～4週間おきに、エラータム系では2週間に1回程度、窒素成分で6 kg/10 a程度施用する。肥料切れになると生育が著しく阻害されるため、追肥は生育状況を見極めながら確実に行う。 うどんこ病やハダニ、ヨトウムシ、ナメクジの発生が多くなる時期であるため、適期防除を心がける。



写真1 採花期の‘さくらひめ’

項 目	作 業 内 容
(2) ばらの栽培管理	5月は気温が上昇し光線も強くなるため、花卉の焼け症が発生しやすい。曇天や雨天が続いた後の晴天時には、遮光管理する。採花期にあたる赤系品種では、日中の数時間を遮光する。 うどんこ病が激発しやすい時期であるため、薬剤防除を徹底する。発生時には、夜間の温室内湿度低下に努め、病気の進行を遅らせる。アーチング栽培では、力枝の生育が旺盛となるため、光の当たらない古葉が落葉しやすい。また、ベンチ下は枯葉が溜まり通気性が悪くなるので、灰色かび病の発生源となりやすい。施設内の除湿、枯葉・枯れ枝の除去、定期的な予防散布など、総合的な防除を行う。
(3) 9月咲ききくの挿し芽と定植	9月咲ききくの挿し芽適期は5月上旬、定植適期は5月中～下旬である。 採穂用の親株は事前に殺虫・殺菌剤で防除し、2～3日晴天の続いた午後に採穂する。10～20 cm 程度伸長した、柔らかい健全な芽のうち、先端約5～7 cmを挿し穂として摘み取る。挿し芽時期に早ければ、採取した穂を新聞紙で包み、挿し芽適期まで冷蔵庫に入れておく。 挿し芽用土は、川砂、山砂、パーライトなど排水が良く、無菌のものをを用いる。挿し穂は下葉1～2枚を除去し、基部に発根促進剤を処理して2 cm程度の深さで挿す。 挿し芽した後はハウスで管理し、十分にかん水するとともに、直射日光を避けるために遮光率 60～80%の寒冷紗を展張して葉の萎れを防止する。発根開始まではミスト管理が望ましい。10日ほどで発根が揃うので、徐々に直射日光に慣らすとともに薄い液肥を施用する。根が2 cm 程度に伸長した頃が定植適期である。



写真2 調整した挿し穂



写真3 箱挿しによる挿し芽の状況

項 目	作 業 内 容
(4) シクラメン の育苗管理	定植床の土壌を分析しておき、その結果に基づいて施肥設計する。きくの土壌適正 pH は 5.5～6.5 であり、石灰等で調整する。定植 2 週間前には堆きゅう肥や基肥施用を終え、耕うん、整地しておく。畝幅は 120 cm の高畝とし、ほ場内で滞水しないよう排水溝を整備する。 5 月の肥培管理は 4 月と同様に、側芽の形成・発達を促すために窒素濃度で 50 mg/L (ppm) の液肥（窒素：リン酸：カリの成分比が 2：1：2）を 3～4 日間隔で施用する。5 月以降は気温が上昇するため、生育速度に応じてかん水量や間隔を調整する。用土に乾湿の差があると、苗の老化が促進されて枯葉が発生することから、一定の温度となるよう努める。 日中の高温は生育を抑制するため、50～70%の遮光資材を展開することで施設内温度が 30℃を超えないように心がける。 シクラメンホコリダニは高温乾燥が続くと発生し、多発すると出荷期まで被害が続くので、この時期から適切な防除を行う。

(作成 農林水産研究所)